ほない歴史通信
第9号
1998.12.1

映像が語る農村像

―農村改良劇「栄ゆく村」のフィルムから―

大子町中央公民館の視聴覚室に、一巻の映画フィルムが保管されています。今から六二年前の昭和十一年(一九三六)に当時の大子町農会によって制作されたものです。フィルムはモノクロで二〇分程の無声映画ですが、そこには、窮乏に喘ぐ当時の農村生活とともに、明日の農業を懸命に模索する農民の姿が生き生きと描かれています。

この映画の原作は、昭和四年(一九二九)一月に町内の大平座において初公演された農村改良劇「栄ゆく村」と、同八年に制作された同劇の後編(経済更生の巻)の二つの創作劇です。これらは、大子町農会の技手や技術員、会員有志によって制作されました。

劇が制作された時代は、世界的規模の厳しい経済不況下にあったいわゆる昭和恐慌期で、日本経済は深刻な破綻状態に追い込まれていました。農村においても農産物価格の暴落とそれによる農家負債の増大、また自然災害による打撃も重なり、当時の農業経営は疲弊そのものの状態に陥っていました。

こうした農村の窮状打開に直接取り組んだのが市町村単位の農会でした。農会はもともと明治以来の農会法に基づき、農事改良を主な目的として設けられた農業団体で、主要な農産物の改良や副業の奨励、農家経営の合理化などを推進していました。昭和恐慌期の窮状著しい農家経済の立て直しにあたり取り組んだのが、農業経営の多角化と共同化でした。大子町農会の場合は、経営の多角化として西瓜などの新作物の導入や胡瓜の促成栽培が試みられ、また共同化においては各集落ごとに設けられた農事組合を実行母体として、田植えや堆肥製造などの共同事業、白菜をはじめとする蔬菜類の共同販売などがおこなわれました。こうした経営再建の途は、昭和七年(一九三二)から実施された国の農山漁村経済更生運動と連動しながら積極的に推進されていきました。

農村改良劇「栄ゆく村」はこうした時代背景の中で生まれたものです。その内容は、疲弊した農村を舞台に、愛知県で農事研究を積んで帰郷した青年が農会の技手と協力しながら共同経営に取り組み、また負債整理組合を設けて経済更生に努め、やがて豊かな村を築いてゆくという筋書きとなっています。劇は町の農業祭や町外でも上演されて大きな反響を呼び、当時の帝国農会や県農会などからの勧めもあって映画化されました。厳しい不況下、明日の農業を夢見て生まれた「栄ゆく村」は、しかし現実には戦時色が強まるなかで挫折を余儀なくされました。

翻って平成不況といわれる現在、山間地域の農業は、農家数の減少や耕作放棄地の拡大といったさまざまな問題に直面しています。こうした農業の明日に夢と希望を描く手立てはないものでしょうか。

この映画フィルムは、当時の農村の姿をリアルに伝えるだけでなく、今日の農業のあり方や広くむらづくりの手法を考える手掛かりを与えてくれるように思われます。

(井上)

明治天皇の茶碗（四）

桜岡滋弥

物産会社東京支店は、のちに独立して川口商店となる。しかし長続きせず、営業権を甲州財閥の雄根津嘉一郎（東武鉄道の創立者）に売却した。これが現在の日清製粉株式会社であり、美智子妃殿下の里方正田家がのちに筆頭株主となる。

華族設置令が施行される時期と前後して、皇室内部での職員雇用制度の改正が行なわれた。それまで職員は公家出身者で占められていたのだが、以後士族を登用するという改正である。水戸藩出身で、脱藩して岩倉具視のもとに走った香川敬三は、明治三年に宮内権大丞兼内舎人長となっている。昔の同志を採用するため香川が奔走していることは、宮内省職員のなかに旧水戸藩士だった藤田東湖の息子健二郎の名が見え、また山口正定も採用されていることで明らかである。その山口は、明治五年には侍従、宮内大臣書記官に、同十一年には主猟局長官に、日清戦争時には広島大本営付侍従長に任命され、同二十九年には男爵の称号を授けられている。

山口は、東京市麹町区五番町十番地（現在の東京都千代田区一番町イギリス大使館付近）に土地を購入し家を建てた。この時も、彼は桜岡八郎に五百円の金員を捻出させている。明治十七年当時の五百円である。借用書をみると、山口が桜岡に五百円を貸与したことになっている。これは、江戸期のいわゆる大名貸の借用書の形式をとったためであり、借用する側の大名が貸す側の商人に金を貸し付けるという慣例によったものである。ちなみに、桜岡は山口からその五百円を返してもらっていない。

さて、山口は明治三十五年に病死し、あとを継いだのが長男豊男である。豊男は明治十年の生まれ、父の死と同時に男爵家を継いだ。妻は、男爵西五辻文仲の長女正子である。正子は大正天皇の皇后節子（のちの貞明皇后）に仕える女官で、藤袴権典侍という源氏名をもっていた。

この夫婦には二人の息子がいて、長男が明治四十年生まれの正男、次男が同四十三年生まれの定男という。大正十一年、長男が父のあとを継いだが、昭和期に入って山口家に一大事が起こった。次男の定男が、赤化華族として検挙されたのである。

ロシア革命以後、マルクス・レーニン主義思想は日本にも容赦なく入り込み、華族の若者をも巻き込むほどであった。定男は、学習院高等科から東京帝国大学経済学部に進んだ秀才である。彼が官憲からマークされるような赤化華族になったのは、当時日本女子大学に在学し、同志を募って「ザーリア」（暁の光）なるグループをつくって左翼活動を行なっていた岩倉靖子（父は岩倉具視の孫侯爵岩倉具張、母は西郷隆盛の弟侯爵西郷従道の娘桜子）の影響を受けたからに他ならない。検挙後の靖子は、度々の官憲の説得にもかかわらず転向を拒否。収監先の市ケ谷刑務所内で自殺した。一方定男は、華族戒飭令により譴責という軽い処分であった。母が、かつて大正天皇に女官として仕えていたことによるものである。その後定男は転向し、昭和十五年に兄の死により男爵を継いだ。彼には、妻喜久子との間に裕子という一人娘がいる。

現在、山口家はどうなっているものか。大正八年九月に、曾祖父八郎の末の息子が病死し、それまで交流があった山口家との縁が切れた。しかしながら、かつて山口正定から賜った明治天皇ご幼少の頃御使用という茶碗と二枚の皿が、かろうじて山口・桜岡両家とを結んでいる。

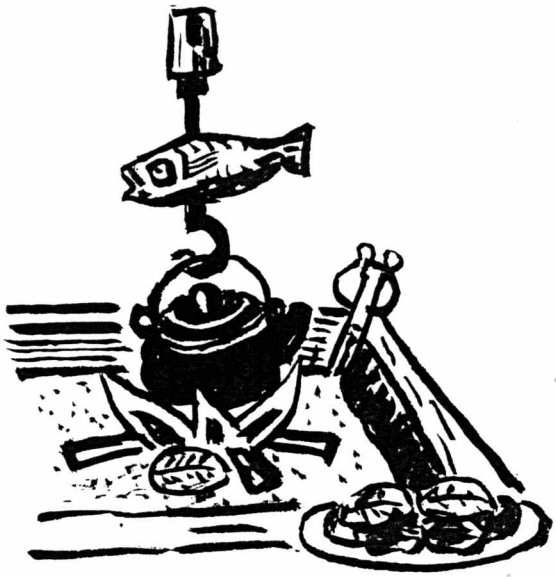
曾祖父八郎にしてみれば、菖蒲会所の頭取に任命されたことでいわゆるブルジョアの仲間入りができた、その端緒をつくってくれたのが山口家、それ故の義理でしかない、私はそう思っている。

（完）

【ふるさと再発見】

大子の郷土食「やきもぢ」

大森政夫



「やきもぢ」は、大子地方でも古くから各家々でつくられており、おやつや保存食として、時には主食として利用されてきた。太平洋戦争中・戦後の食糧難の時代にあっては、米の代用として、この「やきもぢ」が頻繁に食卓にのるようになった。

終戦後間もない頃のエピソードがある。「米の買い出しの列車の中で『やきもぢ』を取り出して食べようとした時、同乗していたアメリカ人がこれを見てびっくりした。『大砲の玉』とでも思ったのだろうか…、と後で当人は大笑いしたという」。

食糧難のため山菜類はもちろん、食べられそうな山草や木の実も採集して食糧にしていた頃、新しい「やきもぢ」が考案されたという。小麦粉を精製する時、不用となる麦皮（飛粉という）を集めて「やきもぢ」をつくったところ「赤いやきもぢ」となり、香しい匂いがするので食してみたらまずかったという。空腹を満たすにはまずい「やきもぢ」でも食べなければならない、そんな時代である。

私も「やきもぢ」はよく食べた。食糧難の時代は小学生だったので、弁当として学校へ持っていったこともたびたびであった。友人も同じで、各家庭でつくった「やきもぢ」の味はそれぞれ異なるので分け合って食べた。「おめえのとこの『やきもぢ』はうまい」等と賞味しながら、簡単でお粗末なお昼のひとときを楽しんだものだった。

「やきもぢ」には「たらしやきもぢ」や「ほどやきもぢ」等があるが、代表的なのが「ほどやきもぢ」である。これは、囲炉裏の「火床」で焼くことに由来する。一般的な作り方を紹介しよう。

小麦粉に味噌を入れ、水で固めにこね合わせる。手ごろに丸めていったん表面を乾燥させ、柿の葉等で包む。囲炉裏の火の燃えている部分（火床）を少し深めに穴を掘る。柿の葉で包んだ生地を火床に入れ、熱い灰で覆う。適当な時間に裏返しして焼き上げる

古老の話によると、囲炉裏では炭火でなく薪を燃やした火床の方がよく焼けるという。また小麦粉をこねる時、残飯などを入れる場合もあるが、やたら具だくさんで色々な味になるよりは小麦粉と味噌だけの方が「ほどやきもぢ」らしくておいしいともいう。焼き上がった「ほどやきもぢ」は固く、柿の葉が黒く焼け落ち、所々に焦げ跡が残る。灰も多少付着するので払い取り、囲炉裏の炉端で叩き割って食べる。焼きたてのそれには味噌の香ばしい独特の匂いがあり、食すとまさに田舎の味がする。

今、若い人から「やきもぢって何？」と問われ、戸惑う。名前、味わいも今となっては知る人ぞ知るで、遠い日の思い出に残るだけとなってしまった。

（大子町頃藤在住）

史料紹介　仮設興行場許可申請書について

茨城県立歴史館所蔵の行政文書の中に、大子保健所が昭和33年～昭和37年に作成した行58-65「仮設興行場許可申請書」がある。これら33件の申請書（実施日とは違う）から、当時の興行のようすを紹介しましょう。

・映画

昭和39年の東京オリンピックを機にテレビが普及するが、当時は映画の全盛時代であった。映画の内容については記載がないのが残念である。

石井辰次郎が昭和33年6月14日に（大子町町付　四百名）を、岡田精志が昭和33年7月28日に（生瀬字小生瀬　百二十名）など4件を、我妻栄が昭和33年10月6日に（大子町左貫　五十人）を、益子善次郎が昭和33年12月4日に（大子小講堂　一千名　音楽教育映画祭）を、本田繁秋が昭和34年1月20日に（大子町町付四百人）など4件を、寺内義房が昭和35年5月16日に（大子町町付座　二百五十名）を、茨城相互銀行大子支店長永盛由夫が昭和36年10月26日に（26日中郷小三百名など）を、黒沢商店会の金沢嘉市が昭和36年10月30日に（大子町町付　三百名）など5件を、大子町消防団長の大森監物が昭和37年3月5日に（上岡小・槇野地小・上野宮小・大生瀬分校・大沢小・湯沢公民館）を、大子たばこ耕作組合が昭和37年9月18日に、たばこ耕作者慰安映画会（下野宮・小生瀬）を、大子町平和委員会が昭和37年12月1日に（大子小講堂　百五十名　講演と映画の会）を申請している。

・歌謡ショー

昭和30年代の初めにできた大子商店会（初代会長金沢常雄、二代金沢孝太）の始めた歌謡ショーはテレビが普及する前でもあったので大変な人気を呼んだ。島倉千代子を招いての最初の歌謡ショーは大子一高の体育館で開かれた（大子町史　下巻）。

大子一高の体育館は昭和32年に創立50周年記念事業として建設され、記念行事としてＮＨＫ「三つの歌」が開催され、その時の観衆が二千名を越えたという（大子一高80周年記念誌）。

大子商店会の歌謡ショーについて次の6件がある。

大子一高で昭和34年11月7日・昭和35年3月29日春日八郎歌謡ショー。大子中体育館で昭和35年9月9日・昭和36年1月12日・昭和36年9月14日三波春夫歌謡ショー・昭和37年1月18日こまどり姉妹トニー谷歌謡ショー。

・村芝居

菊池清二が昭和36年4月7日に（大子町下津原奥久慈橋橋畔二百名）を、石井浩が昭和36年4月13日に（袋田ヘルスセンター前広場　諏訪神社祭典及び桜祭り余興）を申請している。

・サーカスなど（大子町泉町馬セリ場にて）

柳八郎が昭和33年3月20日にサーカスを、藤田栄が昭和34年6月10日に演劇を、田村忠朗（田村サーカス）が昭和38年3月30日に国際空中サーカスを申請している。

これらの申請書には、別紙ということで、内容の記載が省略されているが、年月日から高度経済成長の時代に入ってまもない当時の娯楽の様子がうかがえるであろう。

（野内）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（大子町教育長）
井上和司（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒三一九-三五三一　☎〇二九五七-二-二六二七